



全国連合退職校長会

会報



巻頭言

「戦後70年」今なにを

副会長 (関東甲信越) 清水 章夫

元旦、毎年恒例の各新聞社・社説を通読しました。論旨は共通で戦後70年、新たな日本への期待と決意等々の展開でした。しかし、今こそ教育を

ありません。あの戦後の混乱からの復興、成長期、安定期を過ぎ、大きな転換期を迎えた今、この基盤を支えた日本の教育力に、未来への夢と希望を託すことの喫緊性を強く感じました。

また、新年度は全国連合退職校長会設立50周年を迎えます。この記念すべき新年度、心機一転の気概が求められます。

私共の全連退、そして各地区退職校長会の活動目標は、端的に申せば、「教育振興への寄与」と「会員の福祉の充実」、この二つといえましょう。

その一、教育は、まさに大改革の渦中にあります。

世界のベストセラー「21世紀の資本」の著者、フランスの経

済学者ピケティ氏は、グローバル経済下での格差拡大を警告し、不平等解消のカギである教育にも格差が指摘されています。日本も例外でないとのこと。この

対策には、昨年12月末の中教審答申、「小中一貫教育等柔軟な制度推進」と「高大接続実現に向けた大学入学者選抜改革」への期待大ですが、教育現場の要望・願いの付度こそが課題です。

30年前、臨教審が提唱した「不易と流行」、この両者統一への世論喚起の時です。全連退の結果たす役割ここにありと考えます。

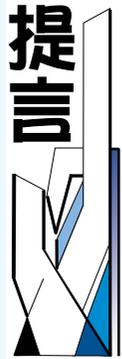
その二、福祉は、「2025年問題」が顕現されています。25年には団塊の世代が75歳以上に、以後総人口の4人に1人の超高齢者社会が到来します。年金・医療等、生活の安定・安心に資する取組が課題です。

本年10月には、共済年金が厚

〔目次〕

- P 2…提言
- P 3…地区連絡協議会(中国・近畿・東海北陸)
- P 4…都道府県だより(岩手・新潟・福井・愛知・広島市・長崎・鹿児島)
- P 8…都・若手教員研修会
- P 9…中教審報告「高大接続問題」
- P 10…中教審報告「小中一貫教育学校」
- P 11…超高齢化社会における医療制度の展望
- P 12…新刊図書を紹介
- P 13…地方の会報紙より
- P 16…五反田だより・編集後記

生年金に一元化されます。年金制度は「世代間仕送り」の仕組み。一元化の痛みの上に、少子高齢化に対応した年金抑制の「マクロ経済スライド」適用など、将来世代の年金確保のため施策転換が図られています。高齢者医療等もまた然りで、持続可能な社会保障制度構築には、高齢者の痛みを伴う改革が不可欠といわれています。戦後70年、設立50周年を契機に、この教育・福祉の諸課題により一層毅然として取り組みたい。そして、日本を担う子どもたちの夢と希望の伸張と、健康で豊かな会員共助の絆を広げてまいりたいと願っております。



キーワードは『魅力化』

副会長 (東北) 鈴木信光

大震災・原発事故から4年がたつ。復興庁によると、岩手は約3万人、宮城は約7万4000人、福島は約12万3000人が、今も県内外に避難している。避難指示が解除された地域では、戻ってくるのはお年寄りが大半で、生活環境への不安などから子どもたちの帰還数は少ない。

福島県では、地元の福島大学が中心となって「大震災後の福島県の教育復興を進める会」を立ち上げた。退職校長会もその一員である。昨年3月、この会が開催した教育復興シンポジウムでの報告によると、被災地県としての社会的課題と教育的課題とが合致せず、被災地から生まれるはずの新しい教育がなかなか生まれてきていないという。

併せて、「島根県立隠岐島前

高校魅力化プロジェクト」の実践報告を聞くことができた。内容は、魅力ある高校づくりを通して持続可能な地域づくりをめざす取り組みである。高校魅力化の基本スタンスを、存続から魅力化へ、できない理由からできる方法へ、といった逆転の発想に置いたという。もともと魅力的だったのは、このプロジェクトに関わる人々は、文部省唱歌『故郷』の歌詞を一部変え、「志を果たして」ではなく「志を果たしに、いつの日にか帰らん」と歌うというエピソードがあった。故郷は都で功成り名遂げてから帰る所ではなく、故郷こそ自分がやりたいことに挑戦する場所にするのだ——というスタッフの熱い思いが伝わる。

昨年10月の朝日新聞でも、各地の高校が魅力化を旗印に動き出していると報じられている。福島県広野町には、故郷の復興を担う人材の育成をめざして、県立中高一貫校「ふたば未来学園高校」が今春開校する。

教育支援活動

副会長 (東海北陸) 江端雅司

現役時代がだんだんかすんで見えるようになってきた今日この頃であるが、家庭・地域の連携とは、例えば、基本的生活習慣の指導でいえば、学校の願いを家庭等にその意義を理解してもらい、共通行動で取り組むことと認識している。

教育基本法の改正に伴って、第13条の具現化する方策の柱として、「学校地域支援本部事業」が立ち上げられ、全国1800箇所モデル校が設置された。

学校中心の教育を地域の方々と共に児童生徒の育成に参画するという画期的な教育の在り方である。その橋渡しの役が、「地域コーディネーター」であり、全国で多くの退職校長が参画されたことと思う。この精神や息吹を教育支援の基本として、

ともに模索していききたいものである。

岐阜県退職校長会では、現場の教育支援として長年個人が地道に実践されてきたが、平成24年度の代議員会で、岐阜県教育委員会から、「大量退職時代を迎え、多くの退職者が見込まれる。その欠員を新採や講師等若年教師で充当することとなり、若年教師の指導力養成が大きな課題である」と示された。そのため、「卓越した教育力や指導力を貸してください」と、退職校長会に学校支援を要請された。

そこで、県教育委員会の指導を受け、「人材バンク」の登録を会員に呼びかけ、組織としての活動が始まった。平成26年度、教育支援を更に幅広くという願いから、24の支部の支部長にアンケートをお願いした。個人的であれ、組織的な支援活動であれ、この3月の代議員会で成果と課題を交流する予定である。



中国地区

期日 26年10月23日・24日
会場 ピュアリティまきび
(岡山市)

出席者 58名

各県の発表・協議

- (1) 鳥取県「『とっとり教育の日』制定に向けての取り組み」
- 「とっとり教育の日」制定の経緯と制定大会以降の取り組み
- 教育に関する啓発活動ができるようになり、関連諸団体との連携の輪が広がりとつあるが、財源の確保が課題である。
- (2) 広島市「東区退職校長会(ふたば会)の活動」
- 平成21年度からの推移と活動(現職・退職校長懇親会・区会だより、日帰り研修・親睦旅行)
- 活動内容の検討を重ね、入会の勧誘策を工夫している。
- (3) 広島県高校「退職校長会としての学校支援活動」

○年一回開催の「教育懇談会」を軸に学校教育支援を進めている。「総合主題」及び「講師」の選定が重要であり、現職校長会と連携し、協同運営を図った。

(4) 岡山県「岡山県の小学校教育再生に向けて」

○教育再生の一助として、教育問題を考察するためのアンケート調査を行い、調査結果は教育再生への提言と激励の言葉を添えて、現職校長会へ届けた。

(5) 鳥根県「これからの退職校長園長会のあり方を考える」

○現職校長へは「退職校長園長会」のイメージや要望・意見を、各支部には「組織改革や財政健全化への努力事例」を調査

○市教委と退職校長会による学方向上策、補充学習「松江からこや」の紹介

(6) 山口県「支部活動の実態調査について」

○支部活動の推進に役立て、広く会員に広報することを目的として、支部の活動実態を調査

近畿地区

期日 26年10月29日(水)
会場 ホテルアウイーナ大阪
(大阪市)

出席者 67名

本年は大阪府が主管で教育みおつくし会が運営にあたった。

最初に近畿地区会長であり大阪「春秋会」会長の松重亨蔵氏のあいさつに始まり協議会が行われた。本年の協議題「新会員

の入会促進と組織の活性化について」滋賀県と大阪府が発表し

兵庫、京都、奈良、和歌山の四府県は紙上発表となった。

「滋賀県」会員数の減少が続いていることと新加入者の加入率が下がっている。その要因として組織離れの傾向が見られ、

現職への情報発信が充分でなかったと考えられると報告があった。組織の活性化に向け会

誌に会員の近況を掲載するなど身近な情報の発信に努め組織の活性化を図っている。

「大阪府」教育なにわ会では、退職者全員を会員としているが、年会費の納入の減少が続いている。会員の高齢化と若年層の意識変化が考えられる。新加入予定者には説明会を実施し加入を促している。大阪では教育改革という流れの中、管理職の置かれて立場に変化があり閉塞感が漂っている。民間の公募校長の採用や管理職を目指す者の減少は、本会の会員の減少に影響している。本会として組織の活性化を図るため会報の充実と情報発信に努めている。この報告のあと、次年度の協議題「組織の活性化と魅力ある事業の促進について」が承認され、次年度開催地「兵庫県」に引き継いだ。

このあとの研修会は人気作家「桂吉弥」さんを迎え、短い時間だが落語会となった。桂吉弥さんは大阪府枚方市で生まれ育ち、桂米朝一門に入門し、大阪での教育を受けたことを感謝する気持ちで伝わり充実した研修会となった。

東海北陸地区

期日 26年11月6・7日
会場 ホテル金沢（金沢市）
出席者 34名

石川・横山恵六実行委員長の歓迎の言葉の後、岐阜・江端雅司協議会長の開会挨拶に続き、全連退常任理事岡野仁司氏から挨拶と全連退本部の活動についての報告があった。

一 研究協議

(1) 学校支援の現状と課題

人材バンク活用で教委と連携し、組織的に取り組みを進めている活動例等が各県から報告された。支援の内容も学習支援、若手教員の育成、環境整備、安全指導、生徒指導、伝統文化の継承など多岐にわたっている。

各支部間の取組みの差、退職校長の高齢化や意識の差、現職校長の遠慮による学校との距離感などが課題としてあげられた。
(2) 東海北陸地区情報誌の発刊
発刊に向けて検討されたが、次年度への継続協議となった。

二 情報交換

(1) 教委や現職校長会との連携
現職校長会との懇談会は各県が実施している。県教委との懇談会は富山・愛知・岐阜・三重等が実施している。

(2) 加入対策

現職校長会へ出向いての勧誘、先輩の働きかけ、機関誌や勧誘資料の配布等が報告された。



閉会に静岡・廣野光美会長から次期開催県の挨拶があった。

三 教育視察

大会2日目、金沢二十一世紀美術館で「3・11以後の建築」展を鑑賞した。



いわての研修活動

岩手県退職校長会

会長 吉村 暢夫

岩手県公立学校退職校長会は会員数2300余、広域な県土を16地区会の構成で活動。

現職校長会との交流懇談会は、東日本大震災時、沿岸被災地の校長体験談が進められた。校舎の津波被害は辛うじて免れたが、押し寄せる避難者への対応、児童の安否確認、保健室への救護所設置等々、通信手段を一切失った中での模索で終夜勤務となる。しかも家族の安否さえも確認できない職員もいる中で過酷という以外に無い。緊急時に要請される、学校の厳しい役割に改めて認識を深めた。

主要事業の一泊二日の県研修・親睦会は県北が会場。研修主題である「縄文文化」については、自然の一員として、自然と一体になって持続可能な社会を作り上げてきたという、縄文

人の生き方に、今改めて学ぶべきことが多くあることに気付かされ、講演・視察共に有意義であった。

近隣地区会連携によるブロック研修会は、内陸Bブロックと沿岸部Dブロックの2会場。Bブロックでは「平泉文化と国見山廃寺の関係」として、発掘調査の結果、世界遺産平泉より20年以上も古い北上市の国見山廃寺は、その位置、方角等平泉の前史に当たる可能性があるとの新しい見方が提起された。

またDブロックでは「大槌町がめざす小中一貫教育」として、東日本大震災で被災した大槌小と大槌中を新しく一貫校「おうち学園」とし、平成28年度新設校舎で施設・運営一体型として開校することが説明された。校長1名、副校長3名で従来の小・中連携型とは異なり完全な一貫校であることが特徴で、先導的ケースとして、その成果を大いに期待したい。
なお、本会も来年度50周年を迎えることから、実行委員会を発足させ、記念誌・講演・式典の準備作業を進めている。

五十周年を

更なる発展の契機に

新潟県退職校長会

会長 山岸 宏

昭和40年1月に創設された本県退職校長会は、本年五十周年を迎えた。この節目を、これまでの歩みを振り返り、これからの活動の充実発展を考える機会と捉え、記念事業に取り組んできた。このことも含め、本年度の活動を報告する。

○五十周年記念事業の推進

(1) 会報「特集」の掲載

五十周年を本会の意義を会員が共有する大切な機会にしたいと考え、会報では4回にわたり創設趣意書やその後の歩み、今後への提言などを「特集」として掲載してきた。会員の意識高揚につながった。

(2) 総会・記念式典

例年の総会に引き続き、記念式典、講演、祝賀会を開催した。式典では来賓祝辞の後、「退職校長会への期待」と題し若手会員による意見発表の場を設けた。

(3) 記念誌の発行

記念誌は、会の歩み、現職校長会との「教育懇談会」の経緯、教育支援活動の紹介、各支部活動の概要、今後への提言などを簡潔に集約する方針のもとに編集した。会の姿が分かる冊子となった。

○現職校長会との「教育懇談会」

本年は「地域防災を考える」をテーマに開催した。新潟地震から50年、中越地震から10年、各地で様々な災害が発生するなか、学校の防災教育の現状と課題について意見交換を行った。学校が当面する防災教育のみならず、地域との共助、行政との公助などの新たな課題に直面していることを改めて知り、会員が果たす役割についても考える機会となった。

○「教育の日」制定の動き

本年、上越市では「上越市教育の日」が制定され、学校、家庭、地域が一体となって子どもの教育を推進する取組が始まった。この動きが他市町村、県全体に広がっていくことを期待している。

学校教育への応援団に

福井県退職校長会

会長 上坂守男

本会は県内15地区の連合体であり、各地区から選出される37名の理事で決議された案件を19名の常任理事と会長、副会長で構成する常任理事会で運営するという形態で活動している。

主な活動は毎年5月に総会を兼ねた研修会、年2回「碧窓」という会報の発行、又10年続いている一泊二日の研修旅行である。各地区毎に退職校長の集いで会員の親睦を深め、現職校長との交流連携を図っている。昨年、本会の活動目的が本県教育の振興に寄与することであるのでその目的を果たす具体的な活動が検討され、県教委と協議の上学校教育支援ボランティアの組織作りに取り組んだ。

これまでに蓄積した経験や特技を活かして、会員自らの生き甲斐づくり、地域ぐるみの教育力の向上、更には地域の絆づくりに繋げていくことを願って、全会員に会報等の送付時にボランティア登録申込書を同封した。初回は27名の応募であった。退職直後の若い会員は年金の関係もあり再就職で時間がとれず、女性会員は孫や家族の世話があり、高齢の会員は健康面で支援の気持があっても登録までは……との声が聞こえてくる。元気な会員の多くはそれぞれの地域で様々な組織の中核になって活動に励んでおられるので、登録を多くは期待できないのかも知れない。

学校教育が一層難しくなり、何から何まで学校の責任にする傾向が強まる中、退職校長会は現職校長を始めとする現場の先生方の一番の理解、応援団として静かに見守り、協力を求められれば手を差し伸べる待ちの姿勢も大事ではないかと思う。学校教育の応援団として、地域の教育力を高める社会教育の推進役になりたいものである。

組織の活性化と

現職校長会との連携

愛知県退職校長会

会長 中川正明

私たち退職校長会の活動は、先輩諸氏の思いを確実に引き継ぎ、改善を重ねながら今日に至っている。

ここでは、多方面にわたる活動の中から、「組織の活性化」と「現職校長会との連携」について述べ、本県の報告とする。

○組織の活性化

平成20年度に組織活性化小委員会を立ち上げ、会報の充実や退職校長の会員加入の確保などを検討してきた。

特に、会報の充実に向けては、「生き生きライフ」や「会員交流広場」を設け、会員相互を結ぶ架け橋となるようにした。

「生き生きライフ」欄では、会員が退職後の生活をいかにエンジョイしているかを紹介しながら、会員同士の情報交換の場とした。さらに本年度から、

「会員交流広場」を新設し、「生き生きライフ」から生まれた作品（絵画・書・写真・短歌・俳句等）や会報を読んでの感想・意見を投稿してもらうようにし、

会報が会員交流や連携により一層役立つようにした。

○現職校長会との連携

これまでも、現職の県校長会を講師にした研修会を開催したり、現職校長会の全面的な協力を得て、会員ほぼ全員加入を達成したりしてきている。

本年度から、現職校長会とのさらなる連携を目指し、研修会に現職役員にも参加してもらい、研修会後に現職校長会役員と退職校長会役員がざくばらんに話し合う懇談会をもち、情報交換を行った。また、県の退職校長会のことを現職の方々によりよく知っていただくために、現職校長会の理事や退職予定者に会報を配布するようにした。今後も退職校長会と現職校長会のよりよき連携の在り方を模索していきたい。

広島市退職校長会の活動

広島市退職校長会

会長 原田力

本会は、広島市の公立小・中学校退職校長で組織し、設立24年目を迎えている。現在、会員数は663名である。

年間活動は4月の総会に始まり、本部主管の諸会議、委員会の活動及び区会の活動である。

恒例の行事としては、年度初めに退職校長会が主催する市教育委員会との懇談・懇親会。続いて、小・中学校長会役員との懇談・懇親会がある。教育委員会との懇談・懇親会は、教育長を始め幹部職員多数の出席を得て行い、ここでは主要教育施策と本市教育の推進に関わる現状と課題を知り、意見交換を行うことができる。また、現職の校長会役員との懇談会では教育現場が直面している教育課題を知ると共に意見交換を行う有意義な会である。しかし、本年度は、

8月の広島土砂大災害のため実施できなかった。

委員会活動は「叙勲」「広報」「福祉」「研修」「教育支援」の5つである。活動内容は、叙勲が会員の叙勲申請手続き説明会と申請書類作成の援助。広報は、年間3回の会報の発行と会員や関係機関への配付。福祉は会員の親睦を図る研修旅行、囲碁大会等の実施。研修は講演会、ひろしま探訪等の実施。教育支援は支援者リストの作成と実践事例集の編集・学校等への配付である。この教育支援の活動実績は年間延べ約900回である。

区会は、退職校長会の活動方針を具現する場である。9つの各区分で現職校長会との地区懇談会を開催するなどの区会の行事を工夫し連携を深め、学校等への教育支援や教育行事への参加・協力を行っている。これら退職校長会の諸活動は教育関係機関との連携と強い会員意識のもとに充実・発展するものと考えている。

本県退職校長会の

組織と活動状況について

長崎県退職校長会

事務局長 磯田隆司

本県の退職校長会は、公立の幼・小・中・高校（一支部のみ）の退職校（園）長で組織され、現在1880名の規模である。

本会は、行政区割りに基づく郡市を母体に、離島3支部を含む13支部で構成されている。そのため、県レベルでの活動を企画すれば、結構な予算の裏付けが必要になる。

年間単位でみた県レベルでの会議としては、常任理事会を3回、理事会を1回、支部事務局長会を1回、定例総会を1回それぞれ開催している。

また、「教育の日」事業にちなむ活動として、長崎県教育委員会が設定し県下公立の小・中・高校で実施される「長崎っ子の心を見つめる教育週間」としての学校公開時に、各支部毎

に退職校長会会員が学校を訪問して学校や家庭・地域と関わりを深めるといった学校支援活動に意を用いている。

会員の親睦と福祉増進を図る活動として、年1回本部主催事業としてグラウンド・ゴルフ大会を開催。杵岐・対馬・五島の各支部からの参加も多数あり状況を呈する活動となっている。

平成27年度の定例総会長崎大会では、従来来賓挨拶だけの招聘であった県教育委員会に、新たな試みとして、義務教育課による講話「教育行政について」をプログラムに位置づけた。試行の成果を期待している。

課題としては、新退職校長予定者のうち、本会の意義に対して価値みをする傾向が窺えるようになったこと、加えて県全体の予算面で逼迫傾向が見られるようになったことなどがある。

退職校長会の基に関わることとして、効果的な改善手だてを見出さねばならないと考える。

組織活動の

活性化を目指して

鹿児島県退職校長会

会長 石塚勝郎

教育振興・支援活動推進事業、福利厚生事業を中心に、本会の活性化を図っている。

一、教育支援活動

(1) 毎年、予算化し各支部・各市町村で取り組み、成果を収めている。

(2) 内容としては、基礎学力の向上・家庭や地域の教育力の向上・環境美化活動・安全安心に資するものなどである。

二、広報活動

(1) 年4回の会報には、教育情報・提供・教育振興への提言・会員の生き方等を掲載している。

(2) 会員の所属意識の向上や会員相互の親睦・融和を図るために活用されている。

三、福利厚生

(1) 共済年金制度等についての

研修や障害の重い長期療養中の会員の調査を行い、その結果を会報で情報提供をしている。

(2) 長寿会員への寿詞・記念品の贈呈、病弱会員への見舞金の贈呈・会費減免措置、死亡会員への弔電奉呈を行っている。

四、関係機関・団体との連携

県PTA連合会・県校長協会・県市町村教育長会・県教育委員会との連絡会を開催し、当面する教育課題について、意見交換や情報交換を行っている。

五、県教委への要望書の提出

毎年、県教育委員会へ要望書を提出し、その回答については会報に掲載し、本部・支部・市町村の教育支援に役立てている。

六、還元金の執行

支部の組織の充実と活動の活性化を図るために、活動補助金として還元金を執行している。

教員のニーズに応える研修会

自ら学び行動する子供の成長を目指して

～『できる』『わかる』『よ』にする教育法とは～

(報告)

東京都退職校長会主催、全連退、都教委等後援による「教員のニーズに応える研修会」が、平成27年1月17日(土)に、葛飾区立葛飾小学校で行われた。

寒冷の快晴のもと、192名が参加した。

はじめに、全体会が体育館で行われた。片岡敦子会長は挨拶の中で、「子供たちが小中学校時代に学んだことが礎となって、社会人として立派に役立つ人間に育つよう、若い先生が教育者としての使命を自覚し、課題解決を図る手助けになる研修会にしたい」といわれた。

続いて、次の3つのラウンドテーブル(RT)に分かれて研究協議が行われた。
RT1 東京ベーシック・ドリルの効果的な活用の仕方について
RT2 立ち戻る指導の充実(小

学校)について

RT3 立ち戻る指導の充実(中学校)について

立ち戻る指導の充実(小学校)についてをテーマにしたRT2に密着取材した。ここは、5つのグループに分かれた。それぞれのグループは、現職教員3～5名、退職校長2～3名で構成された。

はじめに講師の傅田学東京都教育庁指導主事から、授業の場面ごとに必要な考え方、習熟度別指導を効果的なものにするための必須事項などについて講義が行われた。

その後、5つのグループが、5年生の算数で、「13・5mのひもを45人で等分すると、1人のひもの長さは何mになるでしょう」という問題で、ワークシヨップを行った。各グループ

とも活発な話し合いが続けられた。私が所属したグループでも若手教員が積極的に意見を交換し合った。退職校長は、疑問点を指摘する程度にとどまった。

各グループの話し合いが終了後、グループの代表が話し合い



の内容を発表したが、話し合いに熱が入り過ぎて模造紙にまとめることができたのは1グループだけで、あとは口頭発表とになった。

最後に傅田先生から、「つまずきの部分を予測するくせをつ

けてもらいたい。そのことで常に状況を確認しながら行うことができ、このことを積み重ねていくことで、生徒の力がどんどんついていく。授業で生徒たちに『わかった』『授業を受けた』『このことを思いを持たせることが学級経営にもつながっていく』という話があった。

再び体育館で全体会が行われた。ここでは、各ラウンドテーブルごとの代表者によるまとめの発表があった。3人に共通し



発表者

ていたことは、「有意義で収穫の多い研修会だった」という言葉だった。今年も「先輩から後輩へのメッセージ」という冊子が配布された。内容は、今までものを一新して、授業に関することを中心にまとめられたものであった。

中央教育審議会報告

「高大接続について」

教育課題答申委員会委員長

田中 昭光

中教審は文部科学大臣から「大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について」の諮問をうけ、高大接続特別部会を設置し（平成24年8月）

○入試における能力の判定、入試方法の多様化や評価尺度の多元化、志願者の多様な能力や適性等の評価

○高等学校教育の質保証や高大接続の在り方

等について検討を進めてきた。

その後、平成25年1月に教育改革を推進する有識者会議「教育再生実行会議」の内容が閣議決定され第三次提言「これからの大学教育等の在り方について」が公表された。高大接続部会はこの提言を踏まえ10月までに14回の会議を行い、12月22日の中教審総会において下村博文文部科学大臣に「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教

育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」吹かせ、未来に花開かせるために」を答申した。

この答申の高大接続の改革は「大学入試」のみの改革を目指すのではなく、高等学校教育と大学教育において新しい時代を主体的に生き抜くために必要な確かな学力（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性」）を十分に向上させ、自ら目標を持って他者と協力しながら新しいことを成し遂げていくことができる人材の育成にあることを目標としている。

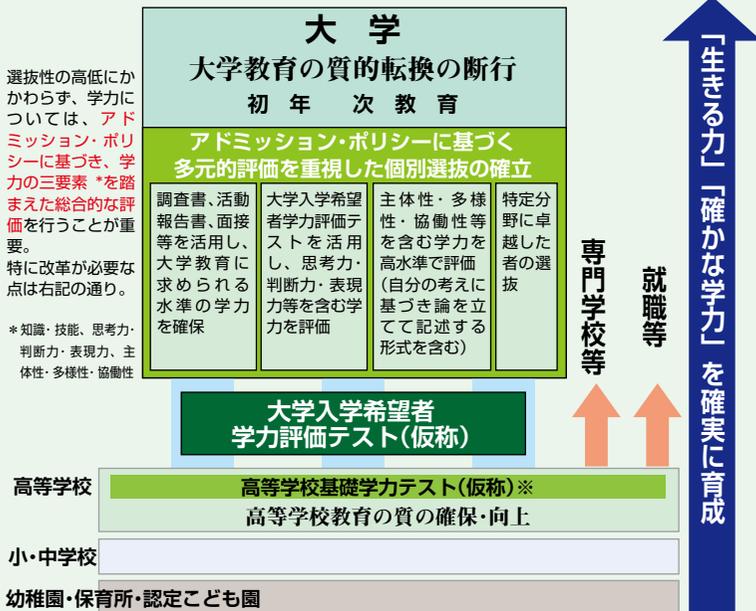
この目標を踏まえ、大学入学者選抜において画一的な一斉試験の正答率による選抜方法を改善していくことが課題である。

具体的な改善策として提案された入学者選抜の全体像は下図の通りである。

この答申案によれば、6年後に大学入学センター試験を廃止し、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」（複数回実施）により「教科型」による「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」との総合的な評価を行

大学入学者選抜改革の全体像(イメージ)(案)

※「高等学校基礎学力テスト(仮称)」は、入学者選抜への活用を未来の目的とするものではなく、進学時への活用は、調査書にその結果を記入するなど、あくまで高校の学習成果を把握するための参考資料の一部として用いることに留意。



うことにしている。

また、その前年度には「高等学校基礎学力テスト（仮称）」を全生徒対象に行い高等学校段階の基礎学力を評価する。（高校2・3年で受験可能とする）各大学はこれらの新たな評価を活用し、多面的評価（小論文、面接、集団討議、プレゼンテーション、調査書、課外・部活動報告、資格・検定試験等）を重視した個別選抜を行う。この答申に基づく改革を6年後から実施する方針であるが高等学校の教育や小・中学校の教育に与える影響が大きい。今後文部科学省の施策決定（制度設計）に慎重な配慮を期待する。

中教審の答申

「小中一貫教育学校」(仮称)と
「小中一貫型小学校・中学校」(仮称)

総務部 木山 高美

中教審は、平成26年12月22日、義務教育の9年間を一貫したカリキュラムで教える小中一貫校を制度化する答申を行った。平成27年の通常国会で学校教育法を改正し、早ければ平成28年度から、自治体の判断で設置できるようになる。

現状では、国の研究開発校や教育課程特例校(現在211自治体で1130件、参加小中学校3421校)などとして、文科相の指定を受ける必要があるため、国に対し小中一貫校を学校教育法に位置付け設置しやすくすることなどを答申している。

中学校で環境の変化になじめず、不登校やいじめが増える、いわゆる「中1ギャップ」の解消などが期待されている。一方で、校舎などの整備や転校時の児童生徒への対応、さらには6年生という最高学年ならではのリーダーシップの育成や、中学入学でリセットして新規にスタートしようという青少年独特の心的発達上の課題等も指摘されている。

小中一貫教育の2つの類型とその制度設計 (案)

	小中一貫教育学校 (仮称)	小中一貫型 小学校・中学校 (仮称)
修業年限	<ul style="list-style-type: none"> 9年 (ただし、転校の等のため、前半6年と後半3年の課程の区分は確保)	<ul style="list-style-type: none"> 小中学校と同じ
教育課程	<ul style="list-style-type: none"> 9年間の教育目標の設定、9年間の系統性を確保した教育課程の編成 小・中の学習指導要領を準用した上で、一貫教育の実施に必要な教育課程の特例を創設 (一貫教育の軸となる新教科創設、指導事項の学年・学校段階間の入れ替え・移行)	<ul style="list-style-type: none"> 9年間の教育目標の設定、9年間の系統性を確保した教育課程の編成 小・中の学習指導要領を準用した上で、一貫教育の実施に必要な教育課程の特例を創設 (小中一貫教育学校 (仮称) と同じ)
編 成	<ul style="list-style-type: none"> 一人の校長 一つの教職員組織 教員は原則小・中両免許状を併有 (当面は小学校免許状で小学校課程、中学校免許状で中学校課程を指導可能としつつ、免許状の併有を促進) [制度化に伴う主な支援策] 9年間で適切にマネジメントするために教職員定数の措置	<ul style="list-style-type: none"> 学校ごとに校長 学校ごとの教職員組織 (学校間の総合調整を担う者をあらかじめ任命、学校運営協議会の合同設置、校長の併任等、一貫教育を担保する組織運営上の措置を実施) <ul style="list-style-type: none"> 教員は各学校種に対応した免許を保有 [制度化に伴う主な支援策] 小中一貫教育の円滑な実施のための教員加配を措置
施 設	<ul style="list-style-type: none"> 施設の一体・分離を問わず設置可能 [制度化に伴う主な支援策] 施設一体型校舎や異学年交流スペースなど、小中一貫教育に必要な施設整備を支援	<ul style="list-style-type: none"> 施設の一体・分離を問わず設置可能 [制度化に伴う主な支援策] 異学年交流スペースなど、小中一貫教育に必要な施設整備を支援

超高齢社会における

医療制度の展望

生涯福祉部長 岡野 仁司

我が国の推計人口構成は、0歳～74歳までの人口が21世紀末まで毎年100万人ずつ減少する。75歳（後期高齢者）以上の人口が2025年ごろまで年間50万人のスピードで急増していくという。

医療分野の視点で考えると、減り続ける0歳～74歳の人向けの医療と、急増する75歳以上の人向けの医療とをどのように調整するのが、これからの医療制度改革の最大の争点になるとみているのは、国際医療福祉大学大学院の高橋 泰教授で、同教授は次のように提言している。

今後長期にわたり減り続ける0歳～74歳の人に必要な医療は、従来からある「急性期医療」つ

まり、治癒を目的とする「とことん型」といえる医療である。

例えば、50歳代のがん患者に対して、手術をし、抗がん剤治療も徹底的に行うなど医療技術も尽くして患者をとことん治療する医療をいう。このような医療の対象者は、病気やケガが治れば元の社会生活に戻れることがほとんどであった。

一方75歳以上の人に必要なのは、後期高齢者も従来型の急性期医療を必要とする場面も少なくないが、主に必要となるのは、病気は完全に治らなくても、地域で生活を続けられるように身体も環境も整えてくれるような「生活支援型医療」、あるいは「まあまあ型」ともいえる医療である。例えば90歳のがん患者に対しては、体力や術後の生活の質を考え、あえて手術を避けて、それ以外の治療を選択する。

また、85歳の肺炎患者に退院後の生活復帰を考え、早期からリハビリを行いながら治療を行うなど、年齢が高くなればなるほど治癒志向よりも生活支援志向の傾向は強まるのである。

我が国全体を見ると、従来の急性期病床の需要は2020年以降、急速な減少が見込まれる一方、生活支援型医療の需要は都市部を中心に増大する。病院などの医療提供側は従来型の急性期病床から生活支援型病床や介護施設への転換が求められる。

ところが、医学教育の現場において、教えられるのは、従来型の「とことん型」の医療であり、「まあまあ型」治療の進め方を教えられるのは極めて少ないのである。

大学の卒業研修も含めた医学教育において、生活支援型の医療を教える比率を急速に高める

ことが急務である。

一方、民間の病院を中心に、試行錯誤を繰り返しながら、高齢者に適した生活支援型医療を提供する医療機関が着実に増え始めてきている。また在宅医療の現場でも、医師、訪問看護師、ケアマネージャーなどの協力により生活支援型の医療が普及し始めていることは、大変望ましい変化である。

患者側にとっても、50歳の患者に適した医療と90歳の患者に適した医療の違いを理解することが求められる。また、「とことん型」医療を得意とし、生活支援型医療の提供を苦手とする大病院を何があんでも志向するのではなく、退院後の生活復帰を考慮しながら高齢患者の状況に応じた医療を提供してくれる、地域の医療機関を見つけ出して、そのような医療機関と上手く付き合うのが肝要である。

全連退
新刊図書の新刊

この度、全連退では、全国都道府県退職校長会の全面的なご協力を得て、本会設立50周年記念事業の一環として、第六回教育関係図書を刊行いたしました。本書は読み進むうちに、その核心に思わず引き込まれてしまうような珠玉の実践の収録です。多くの方々が、手にとってページを捲ってくださることを願っています。特に会員の皆様から現職の先生方にお勧めいただいたり、会員の皆様から現職の先生方への激励本として贈呈していただければ幸甚に存じます。

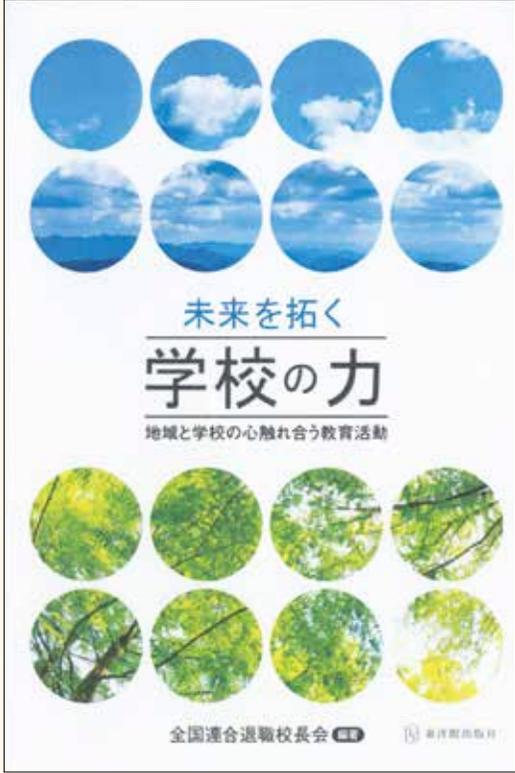
書名
「未来を拓く学校の力」

（地域と学校の心触れ合う教育活動）

内容

第1章 郷土の偉人・歴史・文化に学ぶ
第1節 郷土の偉人・歴史に学ぶ

第2章 郷土の伝統文化に学ぶ
第2節 地域の特徴を生かした教育活動
第1節 地域の自然を生かして
第2節 地域への貢献を目指して
第3章 災害からの学びと復



待と課題の指摘がある中で、地域に根差した学校教育の不易の精神と伝統ある指導力を直視し、地域の伝統・文化と学校の教育活動の実践を図書として残しておこうとこの出版を企画しました。そして、ここに全国各地の

興・防災教育
第4章 当面する教育課題への取組
第5章 世界につながる・世界に羽ばたく
内容の特色
現在、学校教育への様々な期

地域性（郷土色）の滲む特色ある教育活動とその成果の一端を収録しました。
執筆者の特色
本書の執筆者（大半が本会会員）の特色は全国各都道府県に及んでいるということです。

そして、執筆者は各都道府県退職校長会長の「ご推薦による方々で、その分野のエキスパートとして活躍され、長い学校・学級経営の実践を通して、人知れず様々な「自分ならではの経験と知恵」を持っておられます。その経験と知恵そして教育への情熱を、今、地域の特徴ある教育に取り組んでおられる現職の先生方へのエールとして提供していただきました。

出版は平成27年1月31日
全国の書店で

編著者 全国連合退職校長会
A5判・214頁・横書き
出版社 (株)東洋館出版社
(東京都文京区本駒込)
書店での販売価格 2400円＋消費税

※5冊以上まとめて、ハガキで全連退事務局へ申し込まれると税・送料込みで、
1冊 2200円
事業委員会

地方の会報紙より



鳥取県退職校長会

「積雲」第70号

県民挙げてとりくむ

「とっとり教育の日」の

充実をめざして

会長 西村 英昌

全国では34番目、中国5県では最後に産声を上げた「とっとり教育の日」であるが、その萌芽は既に平成10年頃には見られ

県議会での議員質問などで県民に訴えられたこともあり、その後まさに苦節十数年、ついに昨年2月の制定大会にこぎつけたことは歴代会長さんを中心にした本会の並々なぬ執念の結実といえる。鳥取の子ども達を学校・家庭・地域を挙げてその健全な育成に一致協力してとりく

むことを改めて県民に訴え、教育立県、教育立国につなげようとする思いの結集を昨年11月1

日の第1回「とっとり教育の日」記念大会に具現できたことは私たちにとってまさに感慨入のものであった。本年はその2年目を迎えるわけであるが、より一層共感の輪を拡げ、更に充実した内容の「教育の日」にしていかねばと願っているところである。

本年に入って沖縄県で制定されたことで全国35県に達したことはいよいよ大きなうねりになったことは否めない。豊かな人間性をもち、世界に拡がる大きな夢を持った子ども達の育成をめざして、県民みんなできりくむ「教育の日」をぜひ実現していきたいものと考え



埼玉県退職校長会

「会報」第153号

雨傘と共にゆるやかに

白岡 中村 和江

古稀を迎えたということは目出度いようでもあり、この先に行く末を考えると、不安な部分がないとは言えない。女性の寿命が延びたとはいえただ生き延びている自分の姿を想像すると「哀れ」を感じ、逆に頑張り過ぎて余裕のない生き方も疲れる。もう若くはないということだけは確かなのだ。よりよく生きることの難しさを、この年齢になつて考えさせられる今日この頃である。

さて、こんな私が心の支えにしていることは「茶の湯」である。退職後、再び茶の道を歩くことを選んだのだ。

千利休の唱えた「四規七則」が侘茶の精神として伝承されて

いるが、このことについて一つ一つ述べていくと深い禅の世界に入っていく。

「和敬清寂」の四規、そして茶の湯を学ぶ者にとっての基本的な心得「利休七ヶ条」つまり七則のことである。その七ヶ条の一つに『夏は涼しく冬は暖かく』というものがある。冷暖房の整った現代と、利休の時代とは勿論異なる部分はある。しかし季節に応じた相手への心配りをするにより、人の心の温かさを行き届かせ、当たり前のことをさり気なく行うことの難しさは、実践してみなければわからない。単に部屋の温度だけの問題ではないからだ。

また『降らずとも傘』『時刻は早めに』などがある。

人に迷惑をかけない、人に心配や労を強いることなく、ゆとりを持って平常心であること。この心構えこそ、これから迎える私の残りの人生そのものでありたいと思う。

一日一日を大切に、急ぐことなくゆるゆると歩を進めながら、人生を確かなものにしていきたいものである。

外は秋晴れである。しかし私のハンドバッグの中には、雨傘が控えている。バッグの中で傘は言う。「晴れているから雨が降らないとは限らない。人生いつ何が起ころとも限らない」と。そうか！残りの人生、雨傘と共



香川県退職校長会
「会報」第21号

うちの子、 先生の順が悪うて：

坂出 赤尾 和代

学校を出て、すぐに担任した子どもの保護者に開口一番こう言われた。「うちの子、毎年先生が代わって、3年生の時は、3人も代わった。初めの先生はお産で休んで、代わりの先生も

病気になって、今まで、先生の順が悪うて：」「今度こそ、持ち上がって卒業させていたあ

よ」との声、声。私はその時、小学校は臨免しか持たない1年契約の新米の臨時講師であった。私は今年1年契約なんです」と喉元まで出かかった言葉をぐつと飲み込んで「精一杯頑張りますので、よろしくお願いたします」としか言えなかった。

今から50年余りも前のことである。教員採用試験に落ちて、不遇をかこっていた4月上旬、香川郡の山あいの小学校に、講師として採用するという通知が届いた。教育実習2週間しか経験のない小学校へ、私は教師になりたて一心で、向こう見ずにも赴任していった。

「順がいい先生に担任してもらいたい」という親の願いは痛

てもらえるよう頑張ろうと心に誓った。

しかし、右も左も分からない新米講師。初任者研修などなく、先輩の先生をしていることを、見よう見まねで、毎日悪戦苦闘の連続だった。指導に行き詰まり思い悩むことが多かった。自分の指導の未熟さを棚に上げ、子どもを叱ったこともあった。

そんな時、助けてくれたのは子どもたちであった。体育の跳び箱で指導がうまくいかない時、「先生、こなにしたら跳べる」と教えてくれる。研究授業では「おい。みんなで発表せよ」と声をかけ合って授業を盛り上げてくれる。保護者も何かと協力して支えてくださる。忙しいけれど毎日が充実した日々であった。

翌年4月、念願かなって、中学校教師に正式採用された。しかし、子どもたちと別れることは辛かった。桜並木の坂道をつくって行くとき、木造校舎の2

階から、手を振って送ってくれた30人の子どもの姿は、今も目の中に鮮明に焼きついている。(みんなごめん。6年生担任してあげられなくて。今度は順がいい先生に担任してもらいよ。)心の中で詫言ながらバスに乗った。

爾来、38年の長い教師生活。多くの方々に支えられ、定年まで無事に務めることができた。私の教師生活の原点であるあの1年。「順がいいと言ってもらえる教師」これが私の教育実践のモットーである。いつの時代であっても、どんな時代であっても、教育界の潮流が変わろうとも「順がいい先生に担任してもらいたい」という親の願いは不易である。

今朝も、還暦を過ぎたあの時の子どもたちから電話があった。「先生。今度いつ寄る？みんな会いたい言いよるで。」去年会ったばかりなのに。子どもたちとの再会が楽しみである。

大阪教育なにわ会

「会報」第56号

心地よい距離感

阪本 孝美

今、楽しい交友の一つにウォーキングの会がある。高校時代の同級生12〜13名のグループだ。毎年5・6回、野山を歩き四季の風情を楽しんでいる。日帰りが基本だが時折泊を伴う旅もある。発足して14年目、年齢とともに距離は短くなり、坂や階段の少ないコースになってきているけれど。

今更、格好をつける必要もなく、歩きながら、語り、笑い、冗談を言い合う中に、ぼろりと本音が出たりしてとても楽しい。親しさと節度、そしてさりげない優しさ。仲間のこの距離感が実に心地よい。

リーダーに感謝しつつ、これからも体力の続く限りこのウォーキングに参加したいと思っている。

宮崎県退職校長会会報

「芳馨」第81号

「小さい花よ、有難う」

西臼杵支部 田崎 紀美子

爽やかな秋の風に誘われて、家の前の小道に出てみた。片側は下の田に続く土手、よく見ると、ガードレールの支柱の傍に、小さな米粒ほどの赤紫の花が咲いている。余りに小さすぎて、今まで気付かなかった。名前は勿論わからない。ヒメジヨオンやすすき、いたどりや葛の花が、我が物顔に生い茂っている土手の端っこで、このはなは、何と慎ましく精一杯の自分の命を生きていることか・・・。

昨年の11月、私は車椅子のまま、飛行機で、娘の住む大阪に向かった。関西では大きいといわれる病院で治療していただき、暮には家に戻って来た。手押し車や杖を頼りの生活、自由に動

けなくて、惨めな気持ちだった。でも、時間は次第に快い方向に導いてくれる。自力で行動できる半径が少しずつ長くなった。

自分の目で見える景色、肌で感じる風、ひとつひとつが素晴らしいなあ、有難いな、と幸せに思う。(自分なりに精一杯生きることが大切だよ)と感じさせてくれた花だった。

大分県退職校長会

「会報」第152号

子どもたちの笑顔に！

大分坂ノ市 高森 紀郎

私の生活の大半は朝顔・菊作りで占められています。退職後大分南部公民館に勤務していた時、たまたま大菊の大先生にお会いしたことがきっかけで大菊作りに挑戦するようになりました。爾来13年。今は、大分市花卉同好会のお世話をさせて貰っています。

7月の朝顔展、11月の菊花展に出品することも楽しいことですが、今では近隣の小学校の児童が「福助」を育てるお手伝いをすることを楽しみにしています。

数年前、坂ノ市現退職校長会「万弘会」の席で、ある校長先生から「子どもたちに菊を育てさせたいのだが」という話を頂き、会員を伴ってお手伝いを始めました。各学年ごとに植物を育てることを通して「人権・同和」教育をしているので5年生に「福助」の花を育てさせたいとのお話でした。

趣味で始めた菊作りが子どもたちの心育てに役立つならばと始めた事ですが、今では子どもたちの笑顔で元気を貰っています。また、楽しみが一つ増えました。

1年間かけて育てた菊たちが、支所やお寺、公民館や学校、そして子どもたちの前で今年も誇らしげに咲くことを楽しみに毎日汗を流しているこの頃です。

五反田だより (事務局)

平成26年度は、九万人余の会員各位の御蔭で、大過なく幕を降ろすことができました。

ありがとうございます。

平成27年度には、10月15日(木)にアルカディア市ヶ谷において、本会設立50周年記念式典並びに祝賀会を挙行・開催する大事業が予定されているばかりでなく、記念事業も計画しています。

記念事業は、五つの委員長及び委員会所属の委員各位の意を的確に把握した実行委員長(入子祐三総務部長)の緻密な進行計画に則り、着々と実行、実現に向けて進んでおります。

設立から50年の大きな節目に式典や様々な記念事業を行うことは、大きな意義がありますが、節目に、より深遠な意義を見出し、本会の新たな流れを創出し、設立50年の佳節をいっそう意義のある時とすることも大切であると思います。

天下の為に人を得た全連退、お互いに切磋琢磨してまいりましょう。

(T)

◇1月

8 総務部会
15 部長会

20 設立50周年実行委員会
27 設立50周年資料委員会
28 常任理事会

27 出版事業委員会

◇2月

3 平成26年度「年間紀要」
初校正
3 部長会

5 全連退情報第129号発行
13 平成26年度「年間紀要」
再校正

16 広報部会
17 出版事業委員会
19 総務部会

20 平成26年度「年間紀要」
最終校正

24 設立50周年資料委員会
24 広報部会

◇3月

2 広報部会
4 設立50周年資料委員会
5 最終校正

10 部長会
10 出版事業委員会

12 総務部会
16 教育振興部会

17 設立50周年記念誌編集会議
20 教育課題答申委員会
23 第2回副会長会

26 設立50周年記念誌編集会議
26 部長会

全連退ホームページ「表紙の写真」募集について

全連退ホームページの表紙を飾る写真を、会員の皆様から募集いたします。内容は、表紙にふさわしいものであれば、自由です。写真は3~5枚で、メールでの受付のみといたします。採用させていただきますと、作品名とお名前を掲載して一定期間活用させていただきます。宛先は全連退広報部です。今回の募集期間は5月31日までです。

送先メールアドレス info@zenrentai.org

編集後記

寒く厳しかった冬もようやく終り、暖かな春の季節が訪れました。皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

全連退設立50周年記念事業の一環として「未来を拓く学校の力」が刊行されました。ぜひ購入され、「読んだきたい」と思います。また、現職の先生方にもご推奨ください。

3月中旬からは、設立50周年記念誌の編集活動が本格的に始動いたします。広報部員をはじめ担当者一同が、心に残る記念誌の完成を目指して、鋭意努力してまいります。

全連退会報 (195号)

発行 平成二十七年三月十五日
発行所 東京都品川区東五反田

五二一三三三〇八

全国連合退職校長会

電話 〇三三四四二八七六八

FAX 〇三三四四二八七六八

http://www.zenrentai.org/

振替口座 〇〇一九〇九四四七二〇

責任者 戸張 敦雄

印刷 株式会社 信行社

電話 〇三三四三三三六二二